

## 近代日本の世界史教科書における東洋史と世界史の 叙述 : 歴史教育と歴史研究

著者	伊集院 立
出版者	法政大学社会学部学会
雑誌名	社会志林
巻	56
号	1
ページ	23-37
発行年	2009-07
URL	<a href="http://doi.org/10.15002/00021063">http://doi.org/10.15002/00021063</a>

# 近代日本の世界史教科書における東洋史と世界史の叙述

——歴史教育と歴史研究\*——

伊集院 立

日本に於ける世界史教育は1948年5月に始まったとされる。しかし、すでに明治の学校教育において万国史として世界史教育はなされてはいた。ただ、その当時万国史教育はいわば西洋の歴史であり、東アジアの歴史は中国の王朝史であり、両者を連関させる歴史認識の枠組みは形成されていなかった。このようなことから日本においては外国史を西洋史と東洋史にわけるということが一般化し、現在も大学の歴史学科が日本史、東洋史、西洋史で構成されるといった制度が残っている。

近代日本における東洋史学の発展は、大雑把にいうならば、まず教育面で誕生し、それからやがて大学の講座として確立して行ったという特異な歴史をたどっている。明治初期の外国史教育は先にもふれたように欧米の成果を取り入れる形で「万国史」として進められたが、この万国史はいわば西洋の歴史であり、東洋史は含まれていなかった。当時、教科書として使用されたのは例えばギゾー『欧羅巴文明史』（1870年の英訳本が使われた）やスウィントンの『万国史要』（邦訳1886—87年）であったが、それらも東洋の歴史には全く触れていなかった。

しかし、日清戦争前後からこうした傾向に対して、東洋に属する日本の歴史教育は西洋の歴史教育とはことなり、日本自前の東洋史教育を重視すべきだとの傾向が強まった。そうした志向は第二次世界大戦を経て、東アジア世界という認識を生み出し、それが、日本史と東洋史の理解に新たな展望を開いているように思われる。本論は日本近代の歴史教科書を事例にして、明治近代から第二次世界大戦後におよぶ世界史教育における「東洋史」のありかたを考えるものである。筆者はドイツ近現代史を専攻するものであるが、今回日中韓独の研究者とともに東アジアの歴史教育を考えるという機会に恵まれ、敢えて東アジアをふまえて論じることにした。

## I 幕末日本の世界史認識・東アジア認識の転換

1840年のアヘン戦争は日本の知識人に強烈な危機感を呼び起こした<sup>1)</sup>。1843年「阿片始末」を表した斎藤竹堂らの危機感には「抗顔強情請、唯己の利を貧<sup>むさぼ</sup>るのみにして、他人の生死利害を顧みざるは、これ何ぞ礼儀廉恥を知らざるの甚だしきや」とイギリスの暴挙にたいする激しい怒りがともなっていた。しかし、斎藤は確かに「時勢顛倒して、彼此局を<sup>ぎじく</sup>変じ、無礼無義の醜虜を以て、堂々たる仁義の大邦を挫<sup>む</sup>するにいたる」と書きはしたものの、「中夏の未だ曾て識らざるところに出づるもの有るを知らずして、之を防ぐの術を茫乎として講ぜず」<sup>2)</sup>として、中夏とはいつているが中国にかぎらない東アジアの人々がこれまでの東アジア世界のほかに知らない世界が存在すること



また古代、中世、近代という時代区分で歴史を理解するという歴史の学び方、これらについて生徒たちに説明すべきであるとの助言も付されている。フランス革命の経緯に関する要を得た説明とロベスピエールの恐怖政治への言及もなされている。イギリスの項ではイスパニアとの戦争やヴィクトリア女王について論じ、ドイツについては普墺戦争にさいしてハノーファー、ヘッセン＝カッセル、ヘッセン＝ナッサウがプロイセンに組み入れられたと説明している。歴史というよりはまさに当時の同時代史であった。

木村の『史略』が最初の試みとはいえ、なぜ「皇国・支那・西洋」のような三部構成になり、しかも西洋がその三分の二を占めるということになったかの詳細は分からない。しかし、その後『史略』は歴史の授業では使用されなくなり、『日本略史』と『万国史略』が用いられるようになったという。

中等教育においては1880年代末まで独自の教科書執筆はなされず、カッケンボスの『合衆国史』<sup>6)</sup>やギゾーの『欧羅巴文明史』<sup>7)</sup>の英訳本が教科書として読まれ、バックルの著作『英国文明史』<sup>8)</sup>も翻訳されて若い読者に広く受け入れられたという。中学校の教科書として翻訳されたのはW. スウィントンの『万国史要』(松島剛訳 上中下 1886-87)であった<sup>9)</sup>。ところで、ギゾーとバックルの歴史観が明治の知識人にもった意味については丸山眞男が『「文明論之概略」を読む』(岩波新書 1986年)で詳しく論じている。丸山はギゾーの著作の第二項からの一節を引用して「他の諸文明においては、ただ一つの原理の、ただ一つの形式の排他的支配が、あるいは少なくとも過度の優越が、専制へとその文明を導いたのに対し、近代ヨーロッパにおいては、社会秩序の諸要素の多様性、それらの一つの要素が他の諸要素を排除しえなかったことが、今日広く行きわたっている自由を生んだのであります。互いに他を根絶しえなかったので、種々の原理はやむなく他の原理に堪えねばならず、そこから諸々の原理が共存し、一種の相互理解に到達することが必要になったのであります」と<sup>10)</sup>。

しかし、こうした歴史の多様性、根絶し得ない異質な存在に目をくぼる見方は、1887年文部省の検定を受けた教科書『萬國歴史』天野為之著(東京、富山房、第14版:1890年)では放棄されている。著者天野はこの教科書を執筆するにあたって、フリーマン(Edward Freeman)、フィッシャー(George Fisher)、ウィルソン(Marcus Willson)、ギボン(Edward Gibbon)、ハラム(Henry Hallam)、ヒューム(David Hume)などの英語の歴史概説書その他を広く読み、教科書の叙述にあたってはアッシリアから説き起こし、1870年の普仏戦争までを叙述している。その規模は総ページ582に及ぶ。彼はその序文に、この書物が世界史(万国史)といいつつも「西洋諸国の歴史に関し、朝鮮なり支那なり日本なり其の他東洋各地については之を度外に放擲して顧み」ないと批判に答えて、次のように述べる。世界史の叙述には一方にパーレー(Parley)のように世界中いかなる国の歴史をも叙述する形式とフリーマン流の歴史上いわば「名声をえなかった歴史」は敢えてとりあげないという立場とがあるという<sup>11)</sup>。ここにいうパーレーの方向とはまさに丸山のギゾーについての評価にかかわるであろうが、カッケンボスやギゾーの著作を英米の学校教科書として出版してきたアップルトン社のシリーズに含まれていた歴史の見方であろう<sup>12)</sup>。こうした多様性

を重視する歴史の見方に対して、天野が世界史教科書を叙述する際にとった方針は次のようなものであった。「万国を一つの社会と見なし、世界全体の発達の事実を序するの目的なれば、建国極めて旧く歴史の材料に富める邦国も、あるいはこの中に記載するだけの価値なきこともあるべきなり。すなわち万国の中について取捨選択をなすを要するなり。……西洋の文明は実に世界万国の上にその影響を及ぼし、世界発達の傾向を指揮する勢力あれども、悲しいかな東洋の文化、東洋の人民は世界全体の大運動には秋毫も関係<sup>しゅうごう</sup>を有せずして、万国史上にその名を留むるだけの功績あらざるを如何せんや」<sup>13)</sup>と。天野の『萬國歴史』は1886年(明治19年)尋常中学校(ほぼ現在の高等学校に相当)の歴史教科が定められた翌年に文部省の検定を通り、北海道・沖縄を除く全国約270の書店で販売され、出版後3年にして14版を重ねた。これをみても、この教科書は非常によく利用され、そこに示された歴史観は日本の若いエリートたちに大きな影響を与えたと言ってよかろう。日清戦争にいたる8年の間に日本の若いエリートたちはこうした歴史意識に基づく世界史教育を受けていたと言えるのである<sup>14)</sup>。

### Ⅲ 歴史教育におけるアジア主義の中国認識と朝鮮認識

以上述べてきたように明治初期の万国史の教科書の内容は実質的に西洋史であったが、その欧米史の多くの書物が、明治初期の日本の漢学者たちによって漢文で翻訳されたことは注目に値しよう。たとえば、格堅勃斯(カクケンボス)の『米利堅志』(1-4巻、岡千仞・河野通之撰訳、1874年)は漢文で出版され、訳者のひとり岡千仞<sup>せんじん</sup>はフランスの歴史家デュリュイの著作を『法蘭西志』(露月楼 1878年)としてまとめ<sup>15)</sup>、これも漢文で翻訳した。こうしたアメリカ史やフランス史の書物が漢文で翻訳されたのは当時の儒学者にあっては「日本の読者のみならず、中国の読者をも意識していたがために、必然」的なものであったと言われる<sup>16)</sup>。そこには岡が、米国民がイギリスの植民地化に決然として抵抗したことや、フランス国民が示した抵抗力とナショナリズムへの共感から、日本の欧化主義一辺倒に対して批判の姿勢をとっていたことが現れており、このころのアジア主義の複雑な性格を示すものを見て取ることができるという。

1880年代末になると、このようなアジア主義は社会ダーウィン主義の影響を受け、変容してくる。1891年(明治24年)出版の中学校用の東洋史の教科書『新撰支那国史』を執筆した北村三郎は、その2年前1889年に『支那帝國史』(東京博文館 上下2巻)を出版している。彼はこの時期に精力的に多数の歴史書を世に問うている。『印度史:附 朝鮮 安南(ベトナム) 緬甸(ビルマ)、暹羅(シャム)』(1889):『土耳其(トルコ)史:附・小亜細亞(小アジア)・波斯埃(ペルシア)及亞刺比亞(アラビア) 各国史』:『護国美談』(1890年):『元寇反撃護国美談』(1891年)などである。『支那帝國史』は教科書そのものではないが、彼が教科書『新撰支那国史』を執筆するさいの元本となったことは間違ひなからう。彼はその序文に幼少から中国の歴史に親しんで来たが、15歳のときに欧州の学問を志した。その後教科書執筆のため再び、『杜氏通典』(唐の杜佑杜が書いた。中国の歴史上初めての形式が完備された政書。全200巻。考証1巻。中国歴代の法令制度の沿革発

展を記録した十通の1つ),『文献通考』(古代から南宋寧宗朝の開禧3年(1207年)に至る歴代の制度の沿革を記した中国の政書),『大唐六典』(唐の玄宗撰,李林甫等奉勅注の唐代官制に関する書物),『大清會典』(清代の行政諸官庁の基本的な法律を総合した法典),『大平御覽』(中国の代表的類書〔百科全書〕。983年完成),『淵鑑類函』(清の康熙帝勅撰の類書。題名は古今類書中の淵海〔深く大きい海〕の意)などを利用して中国の制度,風俗をしらべたほか,仏教・哲学は「維摩経」,『禅家龜鑑』(西山大師清虚休静(1520-1604)の撰。明の万曆七年(1579)に完成)などを参照し,外交等は欧米人の著作を利用したという。北村の考えでは中国史は東洋に関する歴史のみでなく,世界に関わりを持っているので,欧州の歴史,ギリシア・ローマおよびロシアの歴史,さらには中央アジアの歴史・紀行に関する書物も参照したという。

ところで,北村は中国史の書物を著すにあたって,「東洋の為にするの志を抱き」「平素の持論を著し毫もこれを忌避せざりき」<sup>17)</sup>という。最近欧州ではニーブール(Barthold Georg Niebuhr),ランケ(Leopold von Ranke),ペルツ(Georg Heinrich Pertz)らの大家が出て史料批判の方法は「精微周緻」を極めて,ヒューム(David Hume),マコーレー(Thomas Babington Macaulay),ハラム(Henry Hallam)のような政治思想を差し挟むというやり方は専門家は取らなくなっているが,「然れども,著者の支那史は別に見るところあり,純然たる史学の原則に由らざるもまた此れに由る,読者閲覧の際幸いに著者の心事を察せらるれば則ち誠に幸いなり」という。そして,アヘン戦争については次のように述べている。「欧州人が支那に入りて,貿易をせしこと,その由て来たるや久しと謂えどもその戦争を試みたるは実に鴉片事件より始まる。故に此の戦争は実に支那人が欧米各国とともに其の知勇を争うの基となりと謂わざるべからず」と。また,朝鮮に関しては,「朝鮮の国たる,古来より支那帝国の版図となりたれども,近古以来支那の国権振るわず,その勢力朝鮮に及ぼすことをえざりしかば,朝鮮は恰も欧米各国及び我日本の競争の間に挟まりて,攻守ともにその自力を示すことをえず」<sup>18)</sup>としている。北村の教科書叙述への姿勢は歴史学の学問的手法を敢えて取らず「平素の持論」を生徒たちに伝え,「ものがたる」ことを辞さないものであったといえよう。

しかし,日清戦争前後から欧米の万国史に対して自前の歴史研究をふまえた東洋史教育を重視する傾向が強まった。以下に日本における東洋史教育の重視について見て行きたい。

#### IV 明治初期の東洋史教育と自前の教科書の作成

1894年,高等師範学校校長嘉納治五郎(1860-1938)は,同校教授および,大学教授,高等中学校教授などに中等学校における各学科の教科目について調査を行わせたが,このとき第一高等中学校教授であった那珂通世(1851-1908)は歴史科の部会で,外国史教育を西洋史と東洋史とに二分することを主張したという。彼は「従来中等学校の教科には外国歴史と云ふ科目ありてその中にて万国史として欧米にて所謂世界史(欧米及びペルシア・インド等の歴史)を教へ,別に又支那史を詳細に教えたり。なんぞ我が国にては欧米の世界史に於けるがごとく東洋殊に支那の事跡を簡略

にすることをえざるを以てなり。我が国に於ける欧米即ち西洋諸国の歴史は欧米の世界史に準拠してこれを授けて可なれども、支那を初めとして朝鮮インドその他我れに關係多き東洋諸国の事跡については特にこれを較詳に教ふるの必要あるを以て、別に我が国に適切なるこれら東洋諸国の歴史を編成し、以て世界史の一半を補わざるべからず<sup>19)</sup> という。那珂は東洋にある我国にとって東洋諸国の歴史をとりわけ詳しく生徒に教えることが大事であるとともに、東洋諸国についての自前の歴史教科書を編纂しなければならないという。

那珂は日本史の教科書についても同じく本格的な歴史教科書の必要性を訴えていた。それは、それまでの日本史教育では『国史略』〔漢書、巖垣松苗著、全五巻〈1876年刊〉、天地創造から後陽成天皇の聚楽第行幸（1588年）迄の天皇を中心にした歴史や論評〕や『皇朝史略』〔青山延于著、水戸学の史観に沿って帝記を纏めた書物〕、『日本外史』〔頼山陽著、江戸時代（1828年）勤王思想でまとめた歴史書〕など江戸時代のものを含む歴史書が教科書として用いられていたためであった。しかし、那珂はまずは東洋史の教科書として『十八史略』<sup>20)</sup> が用いられていた中国史について、中等学校用の東洋史の教科書を編纂すべきだと考えたという。彼はすでに1888年より自ら『支那通史』四巻（中央堂、1888-90）を漢文で刊行した。彼がこれを敢て漢文で書いたのは『十八史略』に代わる概説書として中等学校で用いられることを意図していたためだという。那珂の若き後輩である三宅米吉によれば、那珂はこの東洋史の教科書のために「材料の蒐集を十分に行ない、その選択を厳密にし、編成の組み立て事実の順序配列を苟もせず行文もまた正確簡明を期した<sup>21)</sup>」という。那珂の『支那通史』は後に岩波文庫（1938-41年刊）に翻訳されたが、その文庫本を読む限り、始めに先ず「総論」として中国・朝鮮・ツングース・チベット等の地理、民族の説明をし、ついで中国通史を上世（周以前の歴史二千年）、中世（秦から宋までの千四百年）、さらに近世（元から清まで六百八十年）に分けて時代区分しており、その叙述の形式も欧米の歴史教科書の形式を取り入れていることが伺える。

那珂は中国古代史のみならず、西域の歴史にも踏み込み、日本の文化の淵源を中国からさらにその西方に求めている。朝鮮の古代史研究にもかなり詳しく立ち入って、朝鮮半島と日本の関係を具体的に叙述しているが、こうした東アジア史の叙述は宋の時代（13世紀）で終わっている。彼がこの点でも『十八史略』を意識したのかどうかは分らない。

那珂はこのような東洋史の教科書を執筆しただけではなく、世界史における東洋史の教育カリキュラムにも具体的な提言を行なっている。尋常中学校の歴史科は日本史を主として世界史を従とすべきであり、その世界史は東洋史と西洋史に二分し、東洋史においては特に中国史を詳しく教えるべきであるとする。そして「東洋歴史は支那を中心として東洋諸国の治乱興亡の大勢を説くものにして、西洋歴史と相対して世界歴史の一半をなすものなり」と主張する。また、「東洋歴史を授くるには我国と東洋諸国と古より互いに相及ぼせる影響いかに注意し、また東洋諸国の西洋諸国に対する関係を説明すべし。これまで支那歴史は歴代の興亡のみを主として人種の盛衰消長を説かざれども、東洋諸国にては東洋諸国の興亡のみならず支那種〔フン族Huns〕、突厥種、女真種、蒙古種等の盛衰消長に説き及ぼすべし」と提案していた<sup>22)</sup>。

## V 日清戦争以降の東洋史の教科書

日清戦争以降、東洋史の教科書が多く刊行されたが、そこにみられた特徴は那珂が強調したように東洋史を中国史に集中させるのではなく、中国の周辺地域にも視野を広げて行く傾向が一層顕著になったことである。さらにそれにとどまらず、新たな特徴が見られた。それは、叙述が東アジアのみならず、南アジア、西アジアなど現在の中東と言われる地域以東のアジア全域へ広がり、さらには西洋諸国との関係においてアジア史を視野に入れることの重要性和必要性が強調されたことである。桑原隲蔵<sup>じつぞう</sup>（1871-1931）の『中等東洋史』（1898年）はアジア大陸に東方アジア、南方アジア、中央アジア、西方アジア、北方アジアの五地域を設定した。そして「東洋史は主として東方アジアにおける、古来の沿革を明らかにすれども、また同時に之と幾多直間接の関係にある、南方アジア及び中央アジアの沿革をも略述せざるべからず」という<sup>23)</sup>。特に清を扱う近世史においては「英国の印度侵略」「阿片戦争」、「露国の中央アジア侵略」、「後印度諸国〔インドシナ〕の状態及び仏国の侵略」の説明に多くの頁を割き、1860年代～70年代の欧米帝国主義諸国のアジアへの進出を説明している。日清戦争では戦争の勃発にいたる朝鮮内部の政治、日清の駆け引きを論じつつ、とりわけロシアに注目し「極東における〔独仏露〕三国同盟」ではロシアの意図が太平洋方面への進出にあると論じている。この桑原の教科書には那珂通世が序文を寄せており、那珂はそれまで東洋史とはいっても「支那の盛衰のみを詳にして塞外〔万里長城の外〕の事変を略し、殊に東西両洋の連鎖なる、中央アジアの興亡の如きは、全く省略に従ふが故に、アジア古今の大勢を考ふるにおいては不十分」と述べている。今日的ないいかたをすれば、帝国主義体制がアジアにおいても成立する時代には東洋史も中央アジアおよび欧米の動向を加えた叙述が必要であると述べていると言えよう。

このような東洋史を中央アジアの動向と欧米諸国の進出との関連で考察しなければならないとする傾向は、日清戦争以降とりわけ強まって来たと言えよう。そのような歴史意識に立った歴史教科書としては田中萃一郎<sup>すいいちろう</sup>（1873-1923）の『東邦近世史』上（東邦協会、1900年）がある。田中は自らその序に日本の帝国大学でランケ流の近代の実証史学を講じたリース（Ludwig Riess 1861-1928）の不肖の弟子であることを嘆じつつも、「明治二十七・八年〔1894-95〕の戦役以来益々其の〔歴史研究〕の必要を感じ以て閑を偷みて之に着手せり」と述べている。日清戦争が日本の東洋史教育に与えた衝撃を物語るものではなかろうか。

その後、日露戦争を経て、第一次世界大戦後の東洋史の教科書で注目されるのは、鳥山喜一（1887-1959）『東洋史観』（東京寶館、1926年）であろう。文章も分かり易く、日清戦争以降の東アジアの国際関係について日本を含む帝国主義諸国による中国領土の割譲、鉄道政策、ベトナム支配について豊富な情報によって詳しく説明し、こうした列国の鉄道政策からもたらされる政治的・経済的な利益についてかなり専門的に論じている。なかでも、最も注目すべきことは、19世紀以来の帝国主義的侵略に対して中国の一部階級に民族意識が目覚め、新文化運動、社会運動、あるいは民族主義的暴動が生じたこと、これらが自主的な国家としての中国を実現したいという欲求の運



動として説明されていることである。また、鳥山は中国のこうした国権回復運動にはドイツとロシアの第一次世界大戦後の状況が大きく影響したのではないかと論ずる。「ロシアは1920年9月に〔中国における〕その治外法権を撤廃し〔第二次カラハン宣言〕—これは先に労農ロシア自身の声明があるにはあったが—、ドイツには1921年5月—ドイツとの協定〔*Reichsgesetzblatt* 1921, Teil 11.〕によって一同様の措置を取った。これまで全くの脅威そのものであったこれらの二国にかかる措置を取り得たことは如何ばかり自国の実力に自信を持ったであろう」<sup>24)</sup>と。そして、「外からの大きい—然も表面相反する如き—勢力の（中略）大きい手こそは、実は全アジアの諸々の問題に、陰に陽に働きかけてくるころの重大な原動力であることは何人も看過することのできない事実であろう」と結んでいる。この「大きい手」とはある時は侵略的であった帝国主義列強が、他の時には民族主義の台頭に柔軟に対応していこうという第一次世界大戦後の新しい時代の動きを示し、それを生徒たちに示唆しようとしていたのではなかろうか。

## Ⅵ 戦後の世界史教科書における東アジア世界の問題

第二次世界大戦後、1949年に世界史という新教科目が新制高等学校に設けられた。これによって、東洋史は、これまで述べて来たように、中国史からアジア史を包含する科目として、またアジアにたいするヨーロッパ諸列強との関係を重視する科目から、さらに世界史というさらに大きな枠組みの中に組み込まれることとなった。この新しい科目を内容的に如何に構成し、如何に教えて行くかを巡っては、教科書執筆者や高等学校の教員の間大きな戸惑いが生じた。それは尾鍋輝彦編『世界史の可能性』（東大協組出版部〈後の東京大学出版会〉、1950）によく現れている。この『世界史の可能性』には、大変興味深い座談会「世界史の基本問題」<sup>25)</sup>が掲載されている。その座談会には、飯塚浩二、石母田正、江口朴郎、橘高信（高校教諭）、遠山茂樹、中村元、増田四郎、三上次男、村川堅太郎、矢田俊隆、山本達郎といった当時の西洋史、東洋史、日本史、インド哲学などの指導的な教授たちが参加していた。座談会では、西洋史と東洋史の教える比重をどの程度にするかなどさまざまな問題が議論されたが、本質的な問題は社会の自己運動による発展段階の問題と異なる社会相互の交渉史をどう位置づけるのか、東洋・西洋といった文化圏相互における文化の伝播・影響・交渉の問題をどのように理解し、教えていくのか、あるいはたとえばマヤ文化・インカ文化といった古代文化は従来の世界史のどこに位置づけられるのか、という問題であったように思われる。戦後間もない時期に突然課せられた世界史教育の問題については、具体的な教科書の叙述につながるような構想はいまだ生まれていなかったと言えよう。

また、文部省の方も1949年4月、文部省教科書局長から各教育委員会、都道府県知事に通牒を送ったとはいえ、その通牒には「それぞれの学習指導要領は目下作成中であり完成は昭和24年度末〔1950年3月〕の予定である」とあり、新しい世界史の科目が設けられたとはいえ、その具体的な内容についての準備は整っていなかったことが伺われる。たしかにこの「要領」には、「全体を通じ戦争・王朝・政治・事件の年代史であってはならない」との総論は述べられてはいたが、そ

れ以外は「社会科の一般的目標に合致させること」「歴史の発展の必然性を理解させること」「現代社会の生活文化を総合的・発展的に理解すること」「事実を合理的・批判的に取り扱う態度と能力を育てること」「史実の理解を通じ、現在の社会並びに経済・政治の問題解決に必要な能力を發展させること」等、通り一遍の教育目標が掲げられるにとどまっていた。従って、この時期の「世界史」の教科書は「東洋史編」と「西洋史編」に分かれて叙述されるのもヤムを得ないことであった<sup>26)</sup>。

その後、1951年、1956年と学習指導要領が改定されたが、戦後の世界史教科書を丹念に分析した鳥越泰彦氏によれば、世界史の教科書は東洋と西洋にわけ、また全世界を古代、中世、近代に分けるという形式が主流で、1950年代後半には1500年あたりをさかいにそれ以前を東洋と西洋の文化圏にわけ、東西交流に重点をおいた叙述がなされるものが多くなるという<sup>27)</sup>。そして、1960年代になると前近代をヨーロッパ世界、東アジア世界、イスラーム世界に分けて記述する方法が定着して来たという。

大航海時代以前の前近代をこの三大文化圏を軸として理解する世界史像は1973年の指導要領で示された。こうして、日本に於ける戦後世界史教科書の大きな変化は1970年代に「文化圏」別の構成をとることによってもたらされたと言える。それは例えば、神田信夫・柴田三千雄の高校世界史の教科書『世界の歴史』<sup>28)</sup>の中国古代史の説明によく示されているといえよう。この世界史教科書の中国古代史の部分は恐らく中国史の専門家神田信夫氏（1921-2003）が執筆されたと思われるが、その叙述を少し詳しく見てみよう。

まず、東アジア世界の性格について、その歴史的中心をなすのは黄河文明を生んだ中国であることを示し、農耕社会を基礎にした王朝国家という点でエジプトやメソポタミアあるいはインドと並ぶとされている。中国は儒教という政治道徳的思想を支えとした官僚制国家で、以後2000年以上の間にわたって王朝の興亡を見ながらも存続したという。また、前16世紀の殷・周では、亀の腹甲や牛の肩甲骨に書かれた「甲骨文字」が用いられ、血縁的・身分的な関係のある諸侯の支配という封建制を取ったこと、Chinaの名前のもとともなった秦は、この封建制に代わって中央から統一的に役人を派遣する郡県制を取ったが、それに対する反乱によって滅んだこと、漢はその教訓から首都の近くには郡県制を、遠隔地には諸侯を配し支配させる郡国制を取ったこと。この過程で儒家の思想が重視され、王朝体制を支える思想的柱となったこと、また、秦の時代から統一的な法制度が形成され、それは律〔刑法〕令〔行政法・民法〕制として東アジアに広く影響を及ぼしたこと、等が説明されている。そして、東アジア世界における朝鮮と中国諸王朝の関係、また漢代の史書に現れる日本の邪馬台国やその後の大陸との関係が説明されている。こうした漢字・儒教・律令そして仏教を核とした東アジア世界における朝鮮・日本さらにはベトナムの相互関係という理解は西嶋定生（1919-1998）氏の東アジア世界論の研究<sup>29)</sup>と密接な関係にあったことを否定することはできないであろう。さらに、1949年の『世界史の可能性』で議論されたそれぞれの国の歴史がもつ発展の法則性、あるいは自律的な発展と諸国間の相互関係あるいは、ヨーロッパ世界やインド世界あるいはイスラーム世界との交渉史という問題を教科書のなかで叙述する可能性が生まれたと考え

られる。

## VII 「東アジア世界」という考え方の意味について

ドイツの歴史学者イェルン・リューゼンは2001年に出版した論文集において、歴史教育は生徒たちに理解させる、分かり易く教えるという際には「語り」(Erzählen)という要素が必要であろうという。その点では、歴史教育は歴史研究と異なるものの、その方法や考え方においてアカデミックな歴史研究と地のつながった関係を築いているべきであると論じている<sup>30)</sup>。世界史教育における東アジア史の問題も全く同じであり、東アジア世界の研究が深化することなくしては、世界史に於ける東アジア史教育の展望も開けてこなかったであろう。

日本においては、とりわけ通史としての東アジア世界の本格的な研究は戦後まで待たなければならなかった。日本においてまとまった東アジア世界論を展開された西嶋定生氏の研究の意味は極めて大きいであろう。氏の東アジア世界論は一方で漢字・儒教・律令・仏教・時間管理を中軸とした文化概念であると同時に、中華帝国を中心に朝貢関係で結ばれた国際秩序としての冊封体制という政治概念でもあった。西嶋氏の認識ではこの冊封体制を支えているのが中国特有の華夷思想と王化思想であるという。

西嶋氏によれば、こうした東アジア世界はおよそ隋唐時代に実現し、唐の滅亡後一時動揺したものの、その後も経済圏としてあるいは文化圏としても存続したという。東アジア世界が政治的・経済的にも、また文化的にも崩壊するのは、19世紀にいたってヨーロッパ資本主義の波がこの世界に及んだときであるとされる。そして、中国を中心とする東アジア世界は19世紀中国の農民運動(太平天国の乱)による内部からの崩壊を経て、明治維新・日清戦争によって最終的に崩壊したという<sup>31)</sup>。それは丁度日本の東洋史教科書の叙述の論調が変化してくるのと重なっているように思われる。

西嶋氏の東アジア世界の変容についての評価を巡っては、様々な議論があり得るであろう。例えば、東アジア世界の歴史は16世紀ころから変化しており、明清交替期においてすでに変化をみせていたとも考えられる。しかも、秀吉の朝鮮侵略についても、西嶋氏のいうように、「日本の民族主義的な思想の発展により、日本は東アジアの一員であるとの意識から脱却してむしろその世界を解体させる動きを示していたヨーロッパ世界そのものに自己を擬体化させようとしていた」と評価できるかどうか議論の対称となるかもしれない。私の考えによれば、秀吉は日本武家社会の統治論理〔国替えの論理〕を東アジア世界に拡大させようとしたものと思われる。しかも、その後の李氏朝鮮、清国、そして江戸幕府の日本の国際的な関係は鎖国体制、禁海体制とされるが、一種の主権国家体制に似た国際関係が生じていたと考えられる<sup>32)</sup>。それは、あたかもウェストファリア条約によってヨーロッパに主権国家体制が成立したことと似たような国際秩序が、東アジアにも成立していたのではないかと想像している。また、朝鮮近世・近代史関係にしても、近年ジェームズ・パレその他の注目すべき研究がなされている。朝鮮の国王と両班との政治的社会的関係、あるいは

李氏朝鮮の実学にたいする理解は日本においては一部の優れた研究を除いて、ほとんどまともな関心は見られないように思う。当時の日本の漢学者といえども、朝鮮実学者に見られる現実的な日本認識への理解についてどこまで認識を深めていたのであろうか。こうした問題への本格的な取り組みは、この時期の日本の東アジア世界に対する認識を考えるうえで重要なテーマであろう<sup>33)</sup>。こうした東アジアの個別の研究は歴史教育の分野においては、東アジアの通史的理解を形成するのに極めて重要であると考えられる。そのことによって東アジアにすむ人びとに自国史と東アジアの歴史との関係を考えるよりどころを提供するのではないかと考えている。

他方、日本史研究者キャロル・グラック氏とインド史研究者エイズリ・エンブリー氏による『西洋史と世界史におけるアジア』に見られるように、世界史教育におけるアジア世界への関心も高まっている。グラック氏は鄭和の航海が乾隆帝によって中止されていなかったとしたら世界史はどのような姿を取っていたであろうかという問題を提起している<sup>34)</sup>。さらには、東アジアとインド洋世界やヨーロッパ世界といった複数の地域世界の関係も、単なる何々世界と別の世界との交流ということにとどまらず、それぞれの世界がもっている歴史構造的な社会や文化の多様性の関係として考察することが可能になると思われる。例えばショドール氏の研究はヨーロッパがやってくる前の1750年までのインド洋世界をイスラーム、ヒンドゥー、東南アジア、そして中国という四つの異なる文化世界の複合体として「再現」する作業を行っているが、これは、昔のインド洋世界に回帰することではなく、その地域に生活する人びとみずからのその後の歴史の変容の出発点としてももとの歴史を再確認することにつながるものと思われる<sup>35)</sup>。

最後に簡単に、西嶋定生氏が提起された「東アジア世界」という概念が日本の歴史意識と歴史教育に持つ意味について触れておきたい。李成市氏によれば「若い研究者からは東アジア文化圏と大東亜共栄圏とはどこがどのように違うのかという質問」がしばしばなされるという。また、東アジアの研究者からは「東アジア世界論」は「かつて植民地時代に、朝鮮の歴史と文化の独自性を否定するイデオロギーであった『満鮮一体論』や『日韓一域論』のように、ふたたび『東アジア』のなかに朝鮮史、朝鮮文化を埋没させるのかという危惧の声すら」よせられるという<sup>36)</sup>。これについて李氏は「東アジア」という一国を越えた広域のなかで歴史や文化を論じるということは、戦後の日本においては、独善的に日本史を孤立化させてきた戦前の歴史研究を克服するために、新たに始まった学問的な試みといってもよい」と述べている。私も李氏の見解と略同じ考え方をしているが、「東アジア世界論」はとりわけ日本人の歴史意識と歴史教育に持つ意味は大きなものがあると考えている。まず、第一に、生徒たちに自分の国の歴史や文化が、孤立して独自に発展してきたのではなく、古代から東アジアの近隣の諸国の歴史や文化から大きな影響を受けてきていることを理解させるとともに、その関係において自分の国に特有な法則性をもって歩んで来たことを理解させるであろう。第二には、ヨーロッパ世界や、インド世界、あるいはイスラーム世界を理解するさいに、それぞれの個別の国々の特徴的な歴史や文化をその個別性に添って理解するとともに、ひとつの文化圏あるいはあるまとまりを持った「世界」に属する民族や国々として理解することを容易にすることが考えられる。また、同じことの裏返しであるが、自分の国の歴史とヨーロッパ世界、インド

世界、あるいはイスラーム世界といったある種のまとまりをもった世界との交渉史や関係史を単に自国とそれぞれの「世界」との関係としてだけでなく、「東アジア世界」という枠組みを媒介として理解することを容易にさせるものとする。それは1750年頃までのインド洋世界を多様な文化的複合体として理解することにもかかわるのではなかろうか。こうしたことは複雑な世界史をより現実的に理解することにつながると思っている。

冒頭にも述べたことだが、西洋やアフリカ・イスラーム世界といった今日我々の生活に極めて重要な問題を提起している地域の歴史教育もそれぞれの地域に関する自前の歴史研究の深化が大きな意味をもっているであろうことをつよく感じている。

【注】

- 1) 宮地正人「幕末・明治前期における歴史認識の構造」：田中彰／宮地正人校訂『歴史認識』〔加藤周一ほか編日本近代思想体系〕13, 岩波書店, 1991年所収。
- 2) 斎藤竹堂「鴉片始末」：『歴史認識』日本近代思想体系13, 岩波書店, 1991年所収。
- 3) 半谷二郎編著、『箕作省吾』旺史社, 同上, 岩波書店, 1991年所収。
- 4) 初編『福沢諭吉全集』慶応義塾編纂 岩波書店, 1958年, 第1巻所収。
- 5) 前掲：『歴史認識』日本近代思想体系13, 岩波書店, 1991年所収。
- 6) G.P.Quackenbos, *Elementary history of the United States*, New York 1869.
- 7) M. Guizot, *General history of civilization in Europe: from the fall of the Roman Empire to the French Revolution*, with occasional notes & tr. by C.S. Henry, New York 1867; do., *Histoire de la civilisation en Europe depuis la chute de l'Empire romain jusqu'à la Révolution française*, Paris 1868.
- 8) H.Th. Buckle, *History of civilization in England*, New York 1867.
- 9) William Swinton, *Outlines of the World's History. Ancient, Medieval and Modern with special relation to the History of Civilization and the progress of Mankind: for use in the higher classes in public schools, and in high schools, academies, seminaries, etc.*, New York 1874.以上のことは宮地正人, 前掲論文に詳しい。また明治期から第二次世界大戦までの小学校・中学校の教科書の目録に関しては, 鳥居美和子『明治以降教科書総合目録Ⅰ小学校篇 [Textbooks of Primary Schools, 1872-1949]』〔東京：小宮山書店1967年〕：『明治以降教科書総合目録Ⅱ中等学校篇 [Textbooks of Secondary Schools, 1888-1946]』〔東京：小宮山書店1985年〕がある。
- 10) 丸山眞男『「文明論之概略」を読む』(上) 岩波新書 1986年, 133ページ。こうした人間の精神の多様性を尊重するというギゾーの考え方は随所に示され, 例えば彼の著作の序にも「諸国民は, あるいは権威のほとんど絶対的な軛の下に, あるいは自由の絶え間ない波瀾に苛まれて生きてきたのである。権威と自由が肩を並べて, 常に抗争しながらも断じて相互に他を無力に陥らしめることなく, 両者とも, 連綿たる長い幾百年を通じてもろもろの政府および人民の宿命をつくった運命の転変と推移に服しつつ相共に生き, 成長してきたことこそ……ヨーロッパ文明の輝かしくもまた独特の性格である」とある。『ヨーロッパ文明史』安土正夫訳, みすず書房 1987, iiiページ。
- 11) Peter Parley, *Universal history, on the basis of geography*, New York 1870; Edward A. Freeman, *General sketch of European history*, London 1876.
- 12) 宮地正人, 前掲論文。
- 13) 天野為之『萬國歴史』東京, 富山房, 第14版：1890年, 3ページ以下。
- 14) 明治初期の世界史〔「万国史」〕教科書の次期ごとに変化する点については, 松本通孝「明治期における国民の対外観の育成——『万国史』教科書の分析を通して——」：増谷英樹, 伊藤定良編『越境する文化と国民統合』東京大学出版会, 1998年所収に詳しい。
- 15) 『歴史認識』日本近代思想体系13, 岩波書店, 1991年所収。G.P.Quackenbos, *Elementary history of the United States*, New York 1869 ; Victor Duruy, *Petite histoire de France depuis les temps les plus reculés jusqu'à nos jours*, Paris 1903; do., *Histoire des temps modernes depuis 1453 jusqu'à 1789*, Paris 1865; do.,

*Histoire de France*, 2vols., Paris 1870.

- 16) 宮地正人：前掲論文。
- 17) 北村三郎『支那帝國史』東京博文館 1889年，（上）3ページ。
- 18) 同前，（下）862，933ページ。
- 19) 三宅米吉「文学博士那珂通行世君伝」『那珂通世遺書』（大日本図書株式会社，1915年）32ページ。
- 20) 宋末元初の曾先之の著。中国ではほとんど忘れ去られたが，日本では中国史の概説書として広く読まれた。
- 21) 三宅前掲書，26ページ。近代日本に於ける東洋史学の発展については，<sup>ただし</sup>旗田巍の簡潔な叙述がある。「東洋史学」『世界歴史事典』第20巻（平凡社，1954年）283ページ以下。
- 22) 「尋常中学校に於ける各学科の要領」『大日本教育會雑誌』1894年11月 157号，50-54ページ。
- 23) 桑原隲藏『中等東洋史』：『桑原隲藏全集』第四巻所収（岩波書店，1968）18ページ。日清戦争以降の西洋史と東洋史の教科書の叙述については，松本通孝氏の研究を参考にして頂きたい。松本通孝「日清・日露と国民の対外観の変化——明治期中学校外国史教科書の分析を通して——」青山学院大学教育学会紀要『教育研究』第44号（2000年）。
- 24) 鳥山喜一，『東洋史観』（東京寶館，1926年）394ページ以下。但し，鳥山はインド・ムガル帝国についても論じているが，近代における朝鮮の叙述は全く見られない。もっとも，鳥山は戦前京城帝国大学で教鞭をとり，『渤海史考』（1915）もあり，本書でも渤海の説明はある。
- 25) 「世界史の基本問題」〔座談会〕：尾鍋輝彦編『世界史の可能性』（東大協組出版部，1950），1～142頁。
- 26) 三上次男『世界史 東洋史編』（中等学校教科書株式会社，1949），板倉勝正『世界史 西洋史編』（中等学校教科書株式会社，1949）。
- 27) 鳥越泰彦「戦後世界史意識の変遷—高校世界史教科書の分析から—」『教育研究』青山学院大学44号（2000年）33-45ページ。
- 28) 神田信夫・柴田三千雄『世界の歴史』（山川出版社，1976年）。現在の世界史の教科書の構成はとりわけ近代以前についてその学問的な内実の疎密の程度は問わないとしても「先史の世界」「東アジア世界」「内陸アジア世界」「イスラーム世界」「ヨーロッパ世界」といった概念で構成されている。これも西嶋氏の東アジア世界論の影響による所が多いと考えられる。たしかに，成瀬治氏は上原専祿氏が東アジア世界，インド世界，イスラーム世界，そしてヨーロッパ世界を軸に前近代世界史像を構築された意義を強調される（同氏『世界史の意識と理論』岩波書店 2001年）。しかし西嶋氏の影響が教科書に及んだのは氏の東アジア世界論が，東アジアの歴史的世界の構造を示したという点でより強い影響力を及ぼしたものと考えられる。
- 29) 西嶋定生「東アジア世界と冊封体制—一六～八世紀の東アジア—」〔1962年〕，「東アジア世界の形成と展開」〔1973年〕『西嶋定生東アジア史論集』第三巻（岩波書店，2002年）所収。西嶋は古代東アジア世界，近世東アジア世界と崩壊・再編を経過し，アヘン戦争以降東アジアとヨーロッパ世界の接触によって解体すると捉えている。「東アジア世界と日本史」〔1975/76年〕『古代東アジア世界と日本』（岩波書店，2000年）。西嶋定生の「東アジア世界論」については李成市『東アジア文化圏の形成』（山川出版社，2000年）が詳しい。

- 30) Jörn Rüsen, “Historisches Erzählen”: in *Zerbrechende Zeit*, Köln 2001, 45.
  - 31) 李成市 前掲『東アジア文化圏の形成』: 西嶋定生, 『古代東アジア世界と日本』 李成市 (編), 岩波書店, 2000年。
  - 32) 例えば, 中村栄孝『日鮮関係史の研究』 吉川弘文館 1965-69年。
  - 33) James Palais, *Confucian Statecraft and Korean Institutions*, Seattle & London, 2<sup>nd</sup> ed. 2002 ; 宮嶋博史, 『両班: 李朝社会の特権階層』 中央公論社, 1995 ; 朴忠錫「李朝後期における政治思想の展開——特に近世実学派の思惟方法を中心に——」『国家学会雑誌』 88-9/10, 88-11, 89-1/2, 1975-76; Martina Deuchler, *The Confucian Transformation of Korea. A Study of Society and Ideology*, Cambridge, Ma., 1992.
  - 34) Ainslie T. Embree & Carol Gluck(ed.), *Asia in Western and World History. A Guide for Teaching*, New York 1997, pp. 204 f.
  - 35) K.N.Chaudhury, *Asia Before Europe: Economy and Civilisation of the Indian Ocean from the Rise of Islam to 1750*, Cambridge, 1990.
  - 36) 李, 前掲『東アジア文化圏の形成』, 4 ページ。
- \* 本論は2007年5月31日韓国のソウル, および2008年10月15日ドイツのブラウンシュヴァイクで行なわれた, ゲオルク・エッカート国際教科書研究所主催, 韓国北東アジア歴史財団共催, ドイツ連邦共和国外務省, 東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センター, 名古屋大学大学教育発達科学研究科, フリードリヒ・エーベルト財団東京事務所後援の「歴史教育と和解—東アジアの比較と展望—」というシンポジウムで報告したものに手を加え, まとめたものである。